

# 西田 獏（にしだ・ばく）

## 1、プロフィール

歌人。本名西田一義。残されたノートにあった短歌、詩、日誌が1冊の遺稿集に収められた。社会主義を学び、死と病と生を文学に昇華させた作家。

<生没>

1921(大正 10)年9月1日 ~ 1947(昭和 22)年8月 17 日

<代表作>

西田獏遺稿集『流れ』

<青森との関わり>

青森市大別内に生まれる。軍属として中国へ渡った後、病を得て帰郷。療養のかたわら短歌、詩作を行う。

## 2、作家解説

作者の名は知らずとも、作品に触れた者はその清冽な流れと奥深さに引きこまれ、長く記憶にとどめるのである。

西田獏は大正 10 年9月1日青森市大別内に生まれた。青森師範学校附属小学校高等科卒業後、県庁給仕となる。昭和 13 年春上京、軍属として中国へ渡るが、結核により内地送還され帰郷する。この頃短歌を作り、映画評などを行う。社会主義運動に関心を持ち、共産黨員として熱心に活動する。しかし病気は一進一退、西平内の陸軍病院療養所に再入所することになる。

昭和 21 年 12 月胸の神経挫滅の手術後の日誌に「絶対安静をやった二、三日後に、僕としてはずい分得る所があった。西田獏として新しく発足しよう」と記し、自己発現への意欲を新たにしていた。翌年1月盲腸手術をするが、悪化。5月帰郷し、8月 17 日 26 歳で永眠。直前まで社会主義の勉強を欠かすことがなかったという。

昭和20年9月4日医師に余命を宣告されての日誌。「我が人生それだけのもの  
であるならば、3年が1年、1年が半年でも、ただ一つ残されたものが死への道で  
あるならば、勇敢にそして静かに入らねばなるまい。生も慾せずまた死も慾せず、  
また生死を否定するものでもない。すべて流水流雲の姿であろう。」

この言葉通り、生きて2年のちこの世を去ったのである。

17回忌の昭和39年、弟西田守義と北彰介により遺稿集『流れ』が発行され、  
西田獏という一人の詩人が蘇生することになる。自身の生と死をみつめ続け、真  
撃に生を終えた作家はまさしく「流水流雲」の心の軌跡を残したのである。

参考 西田獏遺稿集『流れ』(北彰介「西田獏について」)

小野正文『北の文脈』

### 3、資料紹介

#### ○西田獏遺稿集『流れ』

図書

1964(昭和39)年1月15日

250mm×180mm

4冊のノートに記された遺稿をまとめたもの。「雑草」と題し短歌230首「光の中  
を」として詩16篇。「日誌より」には昭和20年9月～22年3月の抜粋。他に発行人  
西田守義「兄のこと」編集者北彰介による「西田獏について」を収録している。84  
ページ。